

藤州江上夜起對月贈邵道士

蘇軾

藤州江上夜起つて月に対し邵道士に贈る  
元符三年(一一〇〇)九月 六十五歳海南島から  
北歸の途上藤州で作る 一韻到底 上平十四寒

- 1 江月照我心 江月我が心を照らし
- 2 江水洗我肝 江水我が肝を洗う
- 3 端如徑寸珠 端に徑寸の珠の如く
- 4 墮此白玉盤 此に墮つ白玉の盤
- 5 我心本如此 我が心本此の如く
- 6 月滿江不湍 月満ちて江湍せず
- 7 起舞者誰歟 起つて舞う者は誰か
- 8 莫作三人看 三人の看を作す莫れ
- 9 嶠南瘴癘地 嶠南瘴癘の地
- 10 有此江月寒 此の江月の寒き有り
- 11 乃知天壤間 乃ち知る天壤の間
- 12 何人不清安 何人か清安ならざらん
- 13 牀頭有白酒 牀頭に白酒有り
- 14 盞若白露溥 盞として白露の溥たるが若し
- 15 獨醉還獨醒 独り酔い還た独り醒む
- 16 夜氣清漫漫 夜氣清漫漫たり
- 17 仍呼邵道士 仍ほ邵道士を呼び
- 18 取琴月下彈 琴を取つて月下に弾ず
- 19 相將乘一葉 相將いて一葉に乗じ
- 20 夜下蒼梧灘 夜下らん蒼梧の灘

●藤州：いまの広西省の藤県。  
江上：西江のほとり。広東省に入り広州湾に注ぐ。

●邵道士 送邵道士彦肅還都嶠の詩がある。その詩によれば「老ひて名を求めず、語は益々真」という人がらで、東坡とは、相隨ふこと十日にして還た歸り去るといふ因縁の交わりであった。

端如の句：端は真(まことに)の意。

●徑寸：直径一寸。

●白玉盤：月をいう。

●湍：急流。

●起舞、莫作三人看：李白の月下独酌の詩。【参考資料】漢詩鑑賞事典 石川忠久二一八頁参照

●嶠南：嶠は山みち、みね。嶺南と  
いうに同じ。五嶺の南の地、いまの  
広東・広西両省。嶺表ともいう。

●瘴癘：南方の濕地に多い熱病。マ  
フリヤなど。

●天壤：天地。

●白酒：清酒に対していう。

●盞：みちあふれるさま。

●溥：露の多いさま。

●漫漫：ながく遠いさま、ひろくは  
るかなさま。楚辞の橘頌に「長夜の  
漫漫たるを終へて。」

●琴：中国古来の弦楽器である七絃  
琴で、箏とは異なる。次頁参照及び

参考資料参照

●蒼梧灘：蒼梧県は藤州の東約 50 km

「琴」という漢字で「きん」と呼ばれる楽器は、古代中国の「七絃琴」として知られる絃楽器を指す。琴柱や琴爪は用いず、徽と呼ばれる 13 個の目印により左手の指で絃の長さを区切って音程を作り、右手の指で絃を弾きます。箏曲演奏家 福田恭子 HP より



瑟は中国古代の弦楽器の一つ。箏(そう)の大きいもの。長さ一～二メートル、幅四〇～五〇センチメートル、普通は二五弦で、二三弦、二七弦などもある。周代から常に琴と合奏するときにつかわれた。柱(じ)で調弦し、両手で弦をつまんで演奏する。日本には奈良時代に伝えられ、正倉院に二四弦瑟の残欠がある。

精選版 日本国語大辞典

【解釈】江上の月はわたくしの心を照らし、江の流れはわたくしの肝を洗い清めてくれる。おおぞらにまろぶ白玉の盤とみえる月が、まさしく直径一寸の真珠となって、今江水の上に墜ちて来ている。これこそわたくしの心の本来の姿なのだ。今や満月のごとく欠けたるくまもなく、静まりかえった江水のごとく波立たぬ。(この心の喜びに) 起ち上がって舞い始めたのは誰だろう。しかしあの李白のように、月とおのれとおのがかげとで、三人というような見方はすまい。ここは五嶺の南、健康に害の多い湿熱の土地がらであるが、これほど冷えびえとした大江の月がある。してみれば天地の間に幸福でない人間などいるはずはないではないか。寝台のそばにはにがり酒もあって、秋の露の丸くおいたように、なかだかく盛り上がっている。ひとりで酔いまた一人で醒めよう。すがすがしい夜の空気は無限にひろがっている。やはり邵道士を呼び、この月光の下に琴を弾じてもらおう。そして一緒に一葉の小舟に乗って、月夜の蒼梧灘の流を下るとしよう。

漢詩大系 蘇東坡 近藤光男より抄出